

佳 作

―第一部門―

社会自立への道



愛 知 県

武 田 賢 二

私は身体障害者通所授産施設の指導員を、定年退職して一年九ヵ月になります。

退職後は足のリハビリと健康管理のため、週三回から四回名古屋市身体障害者スポーツセンターのプールへ通っています。そのかわら同スポーツセンター担当の、身体障害者相談員を名古屋市長より委託され、同市熱田区では身体障害者福祉協会の役員として、微力ながら務めさせて頂いております。

私が真剣に社会自立を考えた十六歳から今日まで無我夢中で過ごしてきましたが、ここらで今までの自分を振り返ってみたいと思います。

昭和七年、大阪に生まれた私は五歳の時、当時は不治の病と言われていた脊椎カリエスと診断されました。

両親は化粧品店を営んでいましたが私の病のため、店をたたみ母の実家がある環境の良い徳島県に移り住むことになりました。脊椎カリエスが、どんな病気なのかも知らない私は、普通の子と変わらないので一緒に歩き、遊んで小学校へも入学し、低学年の頃から大きい夢を持っていました。

弁護士をしていた叔父がいましたが、私は検事になりたくて法律専門書等を一生懸命に勉強して目標に向かっていましたが、社会も戦中戦後の大混乱の時期でもあり、私の大願検事への道は絶望的になり、このショックのため床に就き悶々の日々が数ヵ月間続きました。

心の病が何とか落ち着いた時には、カリエスからの関連で病も凄く進行して両股関節及び両膝関節まで硬直して、両股関節は特別にひどく化膿して膿とともに骨のカケラまでが、時折出てくる状態でした。私は目標もなく、希望もなく、ただ両親の介護に甘えきった毎日で、その後の三年間程は、布団の上だけが私の世界だったのです。ラジオと読書で社会知識等を学び、また弟はよくいろいろと教えてくれました。これが今の在宅重度障害者というのでしょうか。

私が真剣に社会自立を考えたのは、昭和二十三年、五十四歳の父が急死した時です。その頃、父は郵便局勤務で地域の役員をしていて私の世話は、ほとんど父がやってくれていました。

その父が亡くなり、母四十一歳、姉二十三歳、弟十一歳、それに動けない私が残されたのです。翌年、

姉は名古屋の人と結婚しました。いつまでも母や弟に頼ってもおれず、先ず松葉杖でも歩けるようにならなければと、焦りました。

父は生前、地域役員等していた関係で、家へはいつも誰かが出入りして居てその中に、鍼灸の仕事をしていた視覚障害者のAさんが居ました。戦後の大変な時期で、どの人も生活に苦勞をしていた頃でした。

「何とか母に負担をかけずに自分の力で生きて行けるようになりたい」と、Aさんに相談をしました。その結果、Aさんは「足を松葉杖でも、必ず歩けるようにしてやろう」と言って鍼灸マッサージ等をして頂く事になりました。その間、私は眼の見えないAさんのために、むずかしい鍼灸の専門書を読んであげて引き受けました。Aさんの言葉どおり三年後には松葉杖で、歩けるようになったのです。

ちょうどその頃、徳島県にも身体障害者無料巡回診断があり、私にとって良い医師にめぐりあう機会がおとずれました。

その道の権威である永井教授より「日赤病院で入院加療すれば確率は低いが、何とか就職できるまでになるであろう。後は自身の気力と治癒力があるかどうかが問題だなあ」と言われました。

私には気力は充分にあっても問題は治療費のことです。社会では身体障害者福祉法が施行されてもまだ障害者に対しての理解もなく、非常に困難な時期でしたが早速役所へ相談に行きました。

もし快方への率が悪くても、少しの可能性に賭け、「就職出来るようになった時は必ず社会への恩返しをするのだ」と固く心に決めたのは満二十歳の時でした。自分自身で幾度も役所へお願いに行き、二ヵ月後にはようやく入院加療の許可があり、昭和二十八年一月、小松島日赤病院へ入院することになったのです。

その時は膿の出る傷口が四ヶ所あって化学療法、牽引療法と、手術も全身麻酔を断り、局部麻酔にしてもらい、自分の眼で手術の進行を見つめながら、「必ず治ってみせるぞ」という気力でいっぱいでした。

手術の結果、大成功で傷口もすっかり良くなり、七年余りの家庭での包帯交換も、大変だった私達家族の苦労も終止符を打ち、最高の喜びであり、本当に嬉しかったことです。後はギブス、コルセットをはずしてリハビリをするのですが、現在のようにリハビリセンターがあるわけではなく、何もかもが今では考えられないことばかりでした。

それでも二十九年四月に退院出来ることになったのですが、このまま母や弟のいる自宅へ戻れば経済的にも負担をかけ、甘えが出ると思い入寮の更生施設を役所に相談して、病院から直接県立身体障害者更生指導所の洋裁科に入所できました。

子どもの頃に夢に描いていた検事への道ではなく洋裁科でしたが、自分に与えられた運命と思い、必死で基礎を習得し松葉杖で寮から指導所へ歩行訓練を兼ねての通所の一年間でした。ここでは一年間が

入所の期限でした。

この更生指導所を出る時も自宅へは帰らずそのまま住込みで紳士服の洋服屋へ弟子入りをしました。

自分の出来る仕事は朝早くから、健常者ばかりの先輩職人五人の手伝い仕事で技術を覚えながら、掃除洗濯はもちろん、職人達の布団の上げおろし等を這いまわりながら夜遅くまでやり、障害者だからと甘えては居られません。松葉杖がなくては立ってはおれない私にとっては、どの仕事も辛い苦しいことばかりでした。それでも社会自立を決意して七年目にして初めて自分が働いた給料をもらうことが出来た時は、住込みで一ヵ月六百円でした。

目的の紳士服技術の習得の時間も少なく、職人達の身の回りのことをした必死の報酬でしたが、自身健康と将来のことを思いよく考えて、姉の嫁いだ名古屋近郊は織物で有名と聞いていたので、その地を再出発の場所と決めたのが昭和三十一年のことだった。

私には長男として責任もあり名古屋へ出るにあたり、弟に「自分のことは何としてもやって行くから、悪いけど母のことを頼みたい」と言うと、当時弟は、育英資金での高校三年でしたが郵便局へ勤めることに決まっていたので「心配せずに自分のことだけ考えて頑張っしてほしい」と言ってくれました。

姉の居る名古屋であっても姉の家で世話になるわけにもいかず、義兄の知人の紹介でS氏に会い、お互いその場で話がまとまり、そのまま紳士服縫製工場へ住込みで就職したのです。

この工場は、職人は居らず流れ作業で家族とともに若い人八人で各自が身の回りを管理していた。受

け持ち工程はやさしい工程から高度な技術までを順に担当していくのです。この職場でやっと人並みの生活に向かってやって行けると希望が湧いてきました。私も次第に高度な技術の工程を担当し、工場も昭和三十五年には株式会社となり、これで私も一人前の会社員となりました。

次の目標は結婚をし所帯を持つ事にしようと思った時でした。私の一番頼りにしていた徳島の弟が母と二人幸福に暮らしていたのに二十四歳の若さで風邪がもとで急死してしまったのです。昭和三十五年十月のことでした。父の死以来のショックです。

後継ぎとして母を頼み、私はやっと自分で何とかやって行けるようになったところですから、母をみる力もなく母は一人暮らしになりました。母の事を考えると自分の事ばかり考えてはいけないう状況に追い込まれ、責任を感じて仕事に対する姿勢も今まで以上に真剣になり「職場の第一人者になるんだ」と心に決めた。これまでに二本の松葉杖を一本での歩行が出来るようになり、また私の働きが認められて次第に障害者が雇用され、社員も五十人以上に増えて、その内の一割を占める程になっていました。私は品質管理者という責任職を戴く身となり、会社も労働大臣表彰をされたのです。

昭和三十七年、私が二十九歳の時多くの人の有形無形の励ましと協力のお蔭で良き伴侶にも恵まれ、目標であった所帯を持つことが出来ました。

私は父の死をきっかけに社会自立を決意しての目標は、まず松葉杖にすがってでも歩けるようになること。二番目には家族に負担を掛けしないで自分の力で生活すること。第三に人並みの家庭生活を送るこ

とでした。

「自立」とは確固とした信念を持って生きることという。それは深く人間の内面にかかわる問題である。と、何処かで読んだのを思い出しました。徳島での健常者の職人達の身の回りのことを、這いまわりながら朝早くから夜遅くまでやっていた時のことを思うと夢のような環境になり、あの当時の辛く苦しい事を一生懸命にやって来たから今の自分があるのだと感謝の気持ちで一杯でした。

疾病、交通事故等によって途中で障害者となった人は、社会人としての仕事の意義についても認識も自覚もあるのに比べて、幼い頃より障害者となった人達は、仕事についての厳しさも、人間関係のむずかしさも認識が不足しているように思われます。

社会自立への困難な大勢の障害者の仲間も居られますが、第一に就職、第二に結婚と、ハンディを克服しての道は非常に厳しく険しいことは理解できます。

でも私は「自分の将来は自分の力で切り開いていこう」「目標を持って努力する」ということを常に心掛けてやって来ました。

障害者をもつ家族の思いは痛い程わかりますが、過保護から自立しようとする気力も、気構えもほとんどみられないのが実状ではないかと思えます。私自身がそうでしたから…。やはり社会自立への道は自分自身のやる気と、自分に負けない気力と、それに加えて人間関係というか協調性として切り開いていくものであると、自分の体験を通して確信しています。

私は結婚後は共働きで、小さいながらも、自分の家を持つという目標をたてました。勤務先のご好意で寮の管理人をしていた関係で、生活費はずい分助かって貯金も増えていきました。

目標に近づいていた時、徳島で一人暮らしの母が足の骨折で入院し、それに加えて血清肝炎から肝硬変となり、多額の医療費と付添人に払うため貯金はみるみる減っていきました。

「治らない病気だけど、いつまでこの状態が続くかわからない、十年かかるかも…」と、主治医に言われた。月に一回支払いのために徳島への往復も大変になり、母を名古屋へ転院させる事になりましたが、母は「寮でなく一軒家に住みたい」と言うので、中川区の借家に移転しました。

今までの生活費とは比べものにならない程多くかかることはわかって居ましたが、親孝行のために母の願いを聞いたのです。母は十日程通院していたが、また入院となりました。

妻は内職をしながら母の許へ幾度となく、行ってきましたが経済的にも大変な生活では、元氣な顔を母に見せるだけが精一杯の毎日だったようです。私達は生活は貧しくなり、我家の建築費は跡形もなくなりました。

私達の家を持つのは絶望的になった時に、母は六十一歳で永眠したのです。入院から三年余でしたが出来るだけのことはしたので、母に対して心残りは何もありませんでした。

母の死を機に十四年間お世話になった会社を退職し、妻がやっていた婦人服縫製を二人で始めましたが、紳士服の注文仕立てを勧められ、本来の紳士服仕立てをすることになったのです。

自営になったのを機に、名身連の区役員として障害者のために少しでもお手伝い出来るようになり、そのための活動範囲の拡大の意味から、普通自動車免許を四十六年四月に取得しました。

母のために借屋に住んでいた頃、自転車の荷台に乗せてもらい職場までの送り迎えをしてもらった事を思うと、自分の運転で休日等に妻の好きな植物園や緑化センターへドライブ出来るなんて夢のようでした。妻は多くを望まない人で近くへのドライブでも、とても喜んでくれました。

昭和四十九年には、中川区身体障害者福祉協会長、名古屋市身体障害者相談員を委託され、五十九年までの中川区では多くの身障者の皆さんとともに一人でも多くの人の社会自立へのお手伝いにと手話通訳も受講をし、聴覚障害者とも何の不便も感じず話も出来るようになりました。

妻と二人の仕事場には近所の人達が常時、五、六人来ていました。その人達は健常者で、地域の役員をしている人、勤めを持って休日に来る人、また主婦等話の内容也多岐にわたり、仕事をしながらも、結構楽しい毎日でした。

私が用事で出かける時は、妻は一人で必死で仕事をしていました。納期は絶対を守るといのが信用されて、次の仕事につながるからです。

この頃には以前使用した松葉杖ではなく、ロフストランドクラッチ（歩行補助杖）に変えて慣れて歩行も楽になっていました。

五十九年四月より、名身連も社会福祉法人設立に伴い、身体障害者通所授産施設「名身連第一ワーク

ス」縫製科の指導員としてのお話がありました。

そのため五十八年十二月末で紳士服縫製の仕事をやめました。まだ職員になれるという確証もない身でしたが、授産施設開所までの一つの目標を自分なりに立てたのです。

それは多くの人に会い施設への入所について話合うことでした。ありがたい事に十年間区会長として会員の方はもちろんのこと、家族の人達とも常に交流をもっていたので、定員に近い入所希望者も出来ました。

やっと職員としての正式採用が告げられたのは、開所間際の三月末になってからでした。その間は無収入で経済的に大変でしたが、妻は黙って応援してくれてました。

授産施設の指導員に決まると、それまでやってきた名身連の役員は退くことになりましたが、それまでには、名身連会長、県社会福祉協議会長、市長、県知事さん等から多くの表彰状、感謝状を戴きました。思いおこせば三十年前、社会自立への不可能を可能にする入院加療の折に心に決めた、社会福祉への恩返し出来る身になったのだと、感無量でございました。

授産施設では紳士服とは違い主に幼児の衣料で、重度障害者、重複障害者の授産生とともに、それぞれに適した仕事を与えて社会自立への道を歩みゆく重要な仕事の日々になり、私の住居も施設に近い熱田区に転居しました。

先天性、後天性、疾病、事故等の人たち、それに年齢もまちまちで大変な事でしたが、私の信条は、

誰に対しても誠心誠意をもって当たることだったので、やり甲斐のあることでもあったのです。

社会自立への道は険しく、仕事への意欲、自分に負けず、甘えのない気力を持って出来る限りの事は残存機能を活発に動かし、自分でする努力をしてほしいと願っています。

自分が甘えている間は自立は出来ないし、両親や家族は、いつまでも介助をしてくれるとはかぎりません。自分をとりまく環境が今のまま続くという保証はないのですから。そして、どんな状況になろうとも慌てる事のないよう自分を鍛えていってほしいものです。

また、人間関係等は周りの人、友達等から学び社会性を身につけていく事が大切であると、体験を通しての私の確信しているところです。

私も父の死というきっかけがなかったなら、いつまでも何も出来ない弱い人間になっていたことでしょう。それとも、ずっと若い頃に死んでいたのではないかとさえ、思うことがあります。

結婚して三十年余りという長い間、会社の管理者、市の身障者役員、施設指導員、地域役員等を無事に務めてこれたのは、周りの人達と、常に健康管理や諸々のアドバイスをしてくれた妻のおかげです。

「本当にありがとう」と感謝しております。そして「人生は、すばらしい」としみじみ思うこの頃です。現在では、社会福祉も一般社会から理解も深まりつつあります。これから一人でも多くの、障害者の社会自立へのお役に立つべく、心身ともに続く限り頑張っていくことを誓います。

昭和七年生まれ
名古屋市
武田賢二
愛知県

選評

「いま自分にできることは何か」武田さんが人生の方向を選択する時、常に心にあったのはこの言葉だったと思います。脊髄カリエスの治療やリハビリ、縫製技術を修得するための訓練、厳しい修業時代など血のにじむような日々の記述にも力強さを感じさせます。最善の道を自ら選んだ自信がそうさせるのでしょう。障害をもつ人の職業指導への転身もあざやかで、最大の協力者である奥様とともに歩まれた人生は、読む人を力づけてくれます。

(川原正人)